

長期留学・海外インターンシップチャレンジ奨学金 報告書

2026 年 6 月 30 日
国際経営学部国際経営学科 3 年
伊藤千夏

はじめに

私は 2025 年 8 月から 2026 年 6 月までの 11 か月間にわたり、台湾の国立高雄師範大学にて交換留学生として学ぶ機会をいただきました。本報告書では、留学の目的、留学中の学びや生活、そして今後の展望の 3 点に分けてご報告いたします。

なお、本奨学金の受給にあたり、平素より手厚くご指導・ご支援をいただきました国際経営学部の教授陣、事務室の皆様、ならびに関係者の皆様に心より深く感謝申し上げます。

留学の目的

国立高雄師範大学へ留学した目的は、大きく分けて 2 点あります。

1 点目は、高校時代より独学で続けてきた中国語の運用能力向上です。独

学期間は主に中国大陸側の文字（簡体字）や表現を中心に学習してまいりましたが、以前より関心を抱いていた台湾独自の繁体字や台湾語の習得に挑戦したいと考え、台湾への留学を決意いたしました。現在、台湾北部では中国大陸の標準語に近い発音や表現が増加傾向にありますが、南部では依然として台湾固有の表現や台湾語を使用する人口が多いことから、南部の中核都市である高雄市を選択いたしました。

2点目は、1年間の留学期間を通じて新たな学問分野に挑戦することです。現在所属する大学では経営学や経済学の座学を中心とした学びを進めておりますが、将来のキャリアを見据えた際、協働する機会が多いであろう技術・クリエイティブ職の視点を理解することの重要性を実感いたしました。そこで本留学期間中は芸術学部ビジュアルデザイン学科に所属し、実践的な学びに注力いたしました。

大学について

国立高雄師範大学（高師大）は、台湾南部を代表する国立の教育・総合大学です。キャンパスは高雄市中心部に位置し利便性の高い和平キャンパスと、自

然豊かで静かな研究環境を備えた郊外の燕巢キャンパスの2拠点があり、両校地間はシャトルバスで結ばれています。学部は教育、文、理、科技、芸術の5学院で構成されており、特に台湾原住民族の伝統文化継承や人材育成を目的とした「原住民専立学士班」といった独自の教育プログラムを設置している点が大きな特徴です。また、語学センターを中心に約100名から180名規模の留学生や華僑学生を積極的に受け入れており、周囲の優れた教育環境と相まって、異文化理解と専門学びを深めるのに最適な学習環境が整っています。

留学期間の学習について

留学中は、主に大学付属の語学センター（語学学校）における語学学習と、学部における専門授業の履修を並行して行いました。

学部の授業では、芸術の基礎となる「構成」や、以前より関心のあった「広告設計」などを履修いたしました。日本の大学と大きく異なる点は、筆記試験よりもプレゼンテーションや成果発表の機会が圧倒的に多い点です。芸術学部という特性もあり、作品の制作意図や広告デザインの訴求効果などについて、履修生の前で解説・議論する場が数多く設けられていました。私自身、芸術分野の体系

的な学習は初めてであり、毎週課される課題に対して当初は戸惑うことも多くありました。しかし、教授へ積極的に質問を重ねるほか、クラスメイトと放課後にカフェ等で意見を交わしながらご指導いただくなど、主体的な学びを徹底いたしました。

語学面においては、連日約 3 時間の語学レッスンを受講いたしました。

渡航直後は初級レベルの会話にとどまっておりましたが、長年の独学による知識の蓄積と現地での実践的な会話機会が相乗効果を生み、わずか 1 か月で現地学生や同級生と円滑に意思疎通が図れるレベルまで飛躍的に向上いたしました。

また、語学センターでは言語教育にとどまらず、文化体験や外校学習（フィールドワーク）も盛んに行われ、台湾の歴史について多角的に深掘りする機会に恵まれました。特に、日本統治時代の建造物を視察するなど、台湾側の視点から日台の歴史的背景を再認識できたことは大変貴重な経験となりました。さらに、世界各国から集まった留学生との交流を通じて多文化理解を深め、自身の視野を世界規模へ広げることができました。



図 1 広告設計の授業で作成した広告

台湾での生活について

現地での生活面につきましても、実体験をもとに報告いたします。

第一に、台湾社会における現金決済の割合の高さに驚かされました。大規模なショッピングモールや一部の飲食店を除き、クレジットカードが利用できない場面が多く見受けられます。今後渡航される方々にとっても留意すべき点と言えますが、一方で現金支出の可視化が節約の意識付けにつながり、学生生活においては有益な側面もありました。

第二に、行政主導で推進される手厚い環境保全政策が強く印象に残っております。台湾＝バイク社会というイメージが定着しておりますが、現在は電動バイクの普及が著しく、街の至る所に充電・バッテリー交換スタンドが整備されております。さらに、公共シェアサイクル「YouBike」のインフラが非常に充実しており、地域や学生支援の枠組みによって高雄市内の学生は最初の 30 分間無料で利用可能でした。路線バスや鉄道などの公共交通機関も安価で提供されておりますが、運航頻度や網羅性の観点から、このシェアサイクルは日々の移動手段として不可欠な存在であり、私も日常的に重宝いたしました。

第三に、気候環境についてです。台湾の気候は年間を通じて東京の 6 月から 9 月程度の気温で推移いたしますが、梅雨前の 5 月および梅雨明けの 8 月には気温が 35 度から 38 度前後に達し、厳しい酷暑が続きます。高雄市は台湾内でも特に降水量が少ない地域であり、酷暑でありながらも連日快晴に恵まれたため、精神的にも前向きに生活を送ることができました。一方で、12 月下旬から 2 月初旬にかけては一時的に肌寒い日が続き、現地の方々もダウンジャケットなどを着用します。台湾の建築物は夏季の酷暑に特化した設計となっているため、気温が下がると室内が著しく冷え込むという構造的特徴も実感いたしました。明確な四季の移り変わりが少ない環境下では、年末年始であっても気候の変化を感じにくく、時間経過の感覚や気持ちの切り替えに一定の工夫が必要でした。

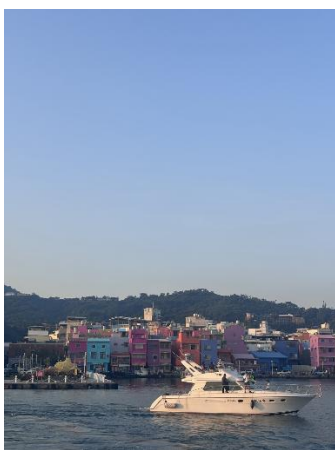


図 2 旗津



図 3Youbike の普及

留学中の長期休暇について

語学センターを履修していた関係上、長期の長期休暇は設けられておりませんでしたが、2月に約3週間の休暇期間がありました。この期間を利用し、スウェーデンおよびポーランドへの渡航を実施いたしました。訪問の理由は以下の2点です。

1 点目は、英語における実践的コミュニケーション能力の維持・強化です。台湾渡航後は中国語中心の生活となり、英語を使用する機会が著しく減少しておりました。そのため、宿泊先には共有キッチンやフリースペースを備えたゲストハウスを選定し、滞在する世界各国の旅行者と積極的に対話を行いました。特に印象深かった事例として、ポーランドで出会ったフランス人および韓国人のフリージャーナリストとの交流が挙げられます。夕食を共にしながら国際情勢や紛争問題について活発な意見交換を行い、多様な価値観や個人の生きた経験に触れることで、非常に密度の濃い学びの時間を創出することができました。

2 点目は、北欧独自の文化・福祉思想の体感と、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所遺跡の直接訪問です。留学中の歴史学習を経る中で、歴史的背景への深い理解が将来国際社会で協働する上で不可欠であると再認識いたしました。そこで、二度の世界大戦において中立の立場をとった北欧諸国と、人種差別・

迫害の極致とされるアウシュヴィッツを学生のうちに自身の目で確かめたいと考えました。

訪問に際しては、現地に精通した日本人ガイドを自ら探し出し、案内を直接依頼いたしました。機械翻訳や文献上の知識にとどまらず、母国語である日本語での解説を通じて、言葉のニュアンスや現地に漂う空気感、歴史の悲惨さを肌で感じ取ることを最優先としたためです。現地で得た深い洞察と学びは、今後の人生における重要な指針となっております。



図4 アウシュヴィッツ強制収容所



図5 ワルシャワ蜂起博物館

留学後について

留学期間中は現地の学業に全力を注ぐため、日本での就職活動は一時休止しておりました。しかしながら、留学中もオンライン等を通じてゼミナール活動を継続していたため、帰国後の秋学期からは「大学の履修単位の修得」「ゼミナールにおける研究活動」「就職活動」の3軸を並行して精力的に推進してまいります。

また、習得した高度な語学力を維持・発展させるため、オンラインでの中国語会話レッスンの受講を開始したほか、日本在住の台湾出身者との交流機会を積極的に設けております。語学力の維持向上を最重要課題と位置付け、日常的に言語を使用できる環境を自ら構築・維持してまいります。

終わりに

渡航前は多大なる不安や懸念を抱えておりましたが、帰国した現在、留学という決断が極めて大きな成長機会であったと確信しております。かけがえのない学びと世界中に広がる友人との思い出を得ることができました。

末筆ではございますが、このたびの貴重な 1 年間の留学機会を温かく支えていただきました中央大学の教授陣の皆様、事務室の皆様、ならびに関係者の皆様に、改めて深く感謝申し上げます。